日本聖公会
ウイリアムス神学館ニュース
2023年
第114号
The Bishop Williams Theological Seminary NEWS
日本聖公会京都教区
発行・編集人：黒田 裕
〒602-8011
京都市上京区桜鶴円町380
TEL：075-431-5406
FAX：075-431-5445
williams@muc.biglobe.ne.jp

聖書の翻訳をめぐって

関西学院大学　嶺重 潔

２０１８年暮れに日本聖書協会より新しい『聖書』（聖書協会共同訳）が刊行されてすでに４年が経過しました。新共同訳聖書が１９８７年に刊行された際には、多くの教会やキリスト教主義学校で比較的速やかに口語訳聖書から新共同訳聖書に移行していった覚えがあるのですが、今回は教会の高齢化や財政的な問題もあるのか、新しい翻訳聖書への移行はあまり進んでいないようです。

私自身もこの協会訳聖書の翻訳に関わり、ある文書の翻訳作業に従事したのですが、その経験を通して聖書翻訳の難しさを改めて思い知らされました。何より私が気づかされたのは、しばしば聖書翻訳の目標として掲げられる「原文に忠実でわかりやすい翻訳」なるものは幻想に過ぎないということだったように思います。すなわち、古代語のヘブライ語やギリシア語で記された聖書の原文に忠実に訳そうとすればするほど、その訳文は難解でわかりにくい日本語になってしまい、それとは逆に、日本語としてわかりやすいものにしようとすればするほど原文の意味からどんどん遠のいてしまうというジレンマがあるのです。そして聖書の場合は教会の礼拝で朗読されるという明確な目的をもっているため、さらに難しい条件が加わります。

その意味では、聖書の本文は、その目的や対象をどこに置くかによって訳し分ける必要があるように思えてきます。事実、一般読者や信徒に対しては、極力難解な表現は避けて日本語としてわかりやすい訳文が求められ、その一方で、研究者や説教者等の聖書を専門的に読む人を対象とする場合は、何よりも原文に忠実な訳文が求められるわけです（因みに現在刊行中のＮＴＪ注解シリーズ［日本キリスト教団出版局刊］では、「古代ギリシア語を解さない読者にも、原典本文の〈手ざわり〉を伝える」翻訳を提示することを目指しており、原文のギリシア語がごつごつしているなら、訳文もごつごつした日本語にするという方針がとられています）。

ただ、やはり一番大切なことは、原文であれ、翻訳であれ、それぞれが自分自身で聖書本文と真摯に向き合うことであるに違いありません。そして、日々聖書本文に親しみ、主体性をもって読み続け、時にはそれと格闘することによって聖書の新しい理解がもたらされるのでしょう。

（みねしげ きよし 本館教授 新約学）

道を伝えて

学生（神学部）時代に心を揺さぶられた聖句がある。「花嫁をもつ者は花婿である。花婿の友人は立って彼の声を聞き、その声を聞いて大いに喜ぶ。こうして、この喜びはわたしに満ち足りている。彼は必ず栄え、わたしは衰える。」（ヨハネ3:29～30／口語訳）

この聖句は洗礼者ヨハネの弟子たちが、自分たちの仲間も含めて、人々が師であるヨハネを離れてイエスの方へ向かうようになったことを告げた時に、ヨハネが語った言葉である。この聖句に触れて以来、私にとって洗礼者ヨハネはヒーローであり、目標となった。

メシア待望の時代、ヨハネの中に人々からの尊敬や人気、あるいは権力を志向する欲望があったとしたら、彼は間違いなく「民衆の王、指導者」になることができたに違いない。しかし彼はそうは生きなかった。主の道をまっすぐ整えるために、自ら徹底してメシアの到来を告げる「声」として生きた。そして斬首刑によってあっけなくその生涯を終える。

投獄される前に「この喜びはわたしに満ち足りている」と語る、洗礼者ヨハネの生き様の中に、真の信仰者の姿を見るのである。

彼のように生きたいという思いは、還暦間近になった今も変わらない。

（土井 宏純 どい ひろずみ 本館教授 法憲法規）

同窓会通信

神学館で生活し学んだ3年間は私にとって第2の青春とも言えるものでした。新しい学び、新しい経験、新しい気付き、新しい出会いが与えられました。多くの方のお世話になり、教役者スタートの準備をすることができ、心から感謝しています。お陰様で一昨年定年を迎え、昨年幼稚園の職も辞し、新潟県から生まれ故郷の名古屋へ帰ってきました。重責から解放され、主日の説教準備を通して神学の学び直しと自らの信仰の問い直しをする日々を過ごしています。神学館にいた頃、家族から離れて生活するさびしさを紛らわすため、オカリナを自室や京都御所の庭園で吹いていました。実習教会で信徒さんたちに頼まれてオカリナの手ほどきをさせて戴きました。きびしい日々の中でホッとするひとときでした。卒業後、行く先々の教会や幼稚園でオカリナサークルが誕生、多くの方と一緒にオカリナを吹き、オカリナがご縁で親しい交わりをさせていただきました。とくに幼稚園では、オカリナはそこそこに、ママたちのおしゃべりに花が咲いたり、子育ての悩みを分かち合ったりしました。このサークルメンバーがPTAの役員を引き受けてくださって、幼稚園の応援団になってくださったことが何回もありました。卒業から22年間幼児からご高齢の方まで多くの方との交流を通して、恵みをいっぱい戴いてきました。有難うございました。

（中部教区 司祭 イサク 伊藤幸雄）

ウイリアムス神学館卒業にあたって

神学館での三年間をふりかえって

ステパノ 高野（たかの） 洋（ひろし）

館長をはじめとする神学館スタッフの皆さん、授業を担任くださった先生方、後援会の皆様、実習教会の司祭様や信徒の皆さん、横浜教区では主教様はじめ聖職養成訓練委員の皆さん、実習を受け入れて下さった教会および関連施設の皆様、母教会の皆さん、その他神学生を気にかけ祈って下さっている皆さん、多くの方々のお支えがあってこその三年間でした。これまでの無事を神に感謝します。

一年目は、三十年余りのサラリーマン生活とはまるで違う濃密な共同生活、経験の無かった神学、コロナ禍による礼拝とリモート授業…、生活と学びに「この年齢で、またイチから学ぶのか…」と時折自暴自棄になる日々でした。二年目は七年ぶりにウイリアムス祭を決行、震災から十年経過した東北の被災地を訪問、履修科目が多く宿題に追われ、病気になるのではないかと思う日々を過ごしました。三年目は卒業小論文を書きながら、また教会実習など様々な場面を通じ、神が求めている（と思っている）自分の姿と本当の自分との隔たり、自分の信仰の無さを思い知らされながら、三年間の学びだけでは聖職に至らないことを痛感しました。今後もさらに学び続けて行けるようにと願っています。

forgive
US OUR TRESPASSES
AS WE
forgive
THOSE WHO TRESPASS
AGAINST US

トレーニング

サムエル　藤井（ふじい）　和人（かずひと）

この三年間を振り返り、私にとって「またとない経験をさせていただいた」その一つに、日々の礼拝が挙げられるように思います。神学校生活の中で、毎日、朝、昼、夕と礼拝をおささげする。当たり前のように思えて、実はそれは私にとって大変なことでした。日々の礼拝を繰り返していく中で、仏教の言葉を借りるなら「煩悩」と言いますか、自分の心がついていかないことも度々ありました。そのような悩みを、ある日、礼拝学の授業の中で打ち明けますと、林和広先生が一言「トレーニングだ」と仰ってくださったことが印象的でした。それからというもの私は、日々の礼拝に向けて心がついていかない時は、とにかく無心になって「自分の身体だけでもそこに持っていこう」と自分に言い聞かせ、ここまでやって来たように思います。

これからの私自身の在り様については今も模索中ですが、神様と隣人との交わりの中で、日々のどんな小さなことにも喜びを感じることのできる自分でありたいと願います。これまでお祈りの内にお支えいただきありがとうございます。「見よ、きょうだいが共に座っている。なんという恵み、なんという喜び」（詩１３３：１）。

三年間を振り返って

ダビデ　梁（やん）　權模（くおんも）

陳腐な表現かもしれませんが、聖アグネス教会の礼拝堂で入学礼拝が行われたのが、まるで昨日のように思われます。入学当初は、私が神学のことを理解できるだろうか、という心配で心がいっぱいだったと思います。ですが、授業を受け、課題を達成していく中で、私なりの神学に対する理解が、少しは深くなっていくように感じられました。特に、課題のための読書を通して、先達の神学者たちが、今の私と同じ悩みを持っていたことが垣間見れたことが、ささやかな慰めと励ましになりました。

また、神学館での生活において、他の神学生との関係やコミュニケーションを通して、自分にとって足りなかったものを新たに学んだことも、重要な体験であったと思っています。神学館に入る前、ただ仕事や課題、そして自分の生活に追われて、私は人との触れ合いのことをあまり気にかけていなかったと思っています。そんな自分にとって、三年間の神学館での濃密な寮生活は、本当に素晴らしい経験であり、学びでありました。

この三年間を通して得られたものを、今後、教区の聖職となっていく中で忘れずに、大切にしたいと思います。今まで見守っていただき、本当にありがとうございました。

神学館の３学期

1月

10日　3学期授業開始
11日　特別集中講義（※）
18日　特別集中講義
25日　特別集中講義
28日　キリスト教講座3学期開講

2月

1日　入学試験
　　受験者無の為中止
8日　特別集中講義
15日　特別集中講義
18日　3学期授業終了
21日　試験準備・補講週
23日　特別集中講義

3月

5日　3学期教会実習終了
8日　特別集中講義・番外編
　　（オールター・ギルドについて）
10日　卒業礼拝

※今学期、6回にわたって「霊性の形成と変容」集中講義が開講されました。これは黒田館長が現在取り組んでいるヴァージニア神学校・博士論文の必須課題である「プロジェクト」の一環として行われたものです。

お知らせ

◎２０２３年度「いまさら聞けない!? キリスト教」講座は休講です。

◎２０２３年度の聴講科目について

２０２３年度は残念ながら本科への入学者はありませんでした。したがって、1年生配当科目は開講されません。２０２３年度の開講科目は、旧約神学、新約釈義、日本キリスト教史、教理学Ⅰ、教理学Ⅱ、聖公会論、礼拝学Ⅰ、礼拝学Ⅱ、教会音楽、ギリシャ語Ⅱ、ヘブライ語Ⅰ、です。詳しくは各教会へお送りしている別刷り「聴講案内」をご覧下さい。

″つかのま″写真集
―工事の合間に編―

２月末で京都教区センタービルの解体が終了、ひととき防塵・防音フェンスと足場が取り外されました。その頃の写真がこちら。

広々とした青空が広がります。烏丸通側のフェンスも外されて、なんと、烏丸通から今まで見たことのないアングルでニコルス館が見えるではありませんか！

そのうち次の工事のためにフェンスが設置され、さらには、次なる建物が建てば、このアングルからニコルス館を眺めることは絶対にできません。これはもう、この時にしかみられない、とても貴重な光景ですね。そんな、つかのまの写真をご紹介します。

以前はスペースの関係でニコルス館の正面を丸ごと写真に収めることができませんでした。ところが今回はそれが可能に！カラーでお見せできないのが残念ですが、正面から見ると、こんな「顔」をしているのですね。

さらに、夜のニコルス館は南東からのアングルで。

こうして少々新鮮な気持ちに浸っていたのも束の間、ほどなくして新たな工事用フェンスが設置されました。

すべてのものには時がある（コヘ３・１）―。備えられた時を、どのように受け止め、どのように生きるか―しばし、立ち止まって晴天を見上げました。この号が発行される頃には、時はまさに春。新たな年度の神学館の歩みが主の時にかなったものとなりますように。（編集部）